セミナーの基調とはややずれたものだったようである). 旧ソ連からの参加も予定されていたが, 実現しなかった. 日本からは他に津谷典子が参加した.

セミナーは, 前日 (26日) イタリア人口研究所で準備会議が開かれた後, 以下, 6つのセッションが順次行われた. Ⅰ. Recent Gender, Family and Demographic Trends in the Industrialized Countries, Ⅱ. Family Policy in Relation to Changing Gender Roles and Family Patterns, Ⅲ. Breakdown of Marital Households and New Living Arrangements in Relation to Gender Change, Ⅳ. Feminist Women's Movement as a Cause and Product of Gender and Family Change, Ⅴ. Family Formation and Gender Change, Ⅵ. Are the Interests of Women Inherently at Odds with the Interests of Children or the Family? View-points, Policy Implication, and Open Discussion.

報告者は全体として女性の方がかなり多かった. 冒頭のオランダのレスタギ (Ron Lesthaeghe) の「西側諸国の第2の人口転換」と題する報告が全体の基調をなし, 彼の挙げたその最終局面の特徴 (出生率低下の停止, 離婚率上昇の停滞など) は近年の日本にも現れている. セミナーのひとつの特徴は多くの研究が現状変革の要求や運動, 政策との関連を強く持っていることである. 最後のまとめのひとつとして行われた Presser 報告で, gendered time (男女間で異なる意味が時間に与えられていること) が一貫して強調されたのが大変印象に残った. このような概念がどのような demographic な研究をさらに生み出していくかに注目したい. なお, 津谷はⅣで「日本の性別役割の変化と置換水準以下の出生力」と題する報告を行い, 筆者はⅢで日本の親子同居について, (1) 高齢者側の性差, (2) 若者側の性差, (3) 女性の労働力参加と初婚年齢への影響を報告した.

なお, 本セミナーについて詳しくは IUSSP News letter No.44 (1992. 1−4) 参照. (廣嶋清志記)

国際人口委員会 (仮称) 第2回準備委員会報告

ロックフェラー財団の提唱・主催による国際人口委員会 (仮称) 第2回準備委員会は1992年3月4日と5日の2日間, イタリア北部コモ湖に面するベラジオで開催された (以下〝仮称〟は省略). ここにロックフェラー財団の国際会議センターが所在する. 出席者はアメリカ合衆国, イギリス, ドイツ, オランダ, スウェーデン, 日本, インドネシア, メキシコ, エジプトの9カ国からの人口問題関係者, 国連人口基金, 世界銀行, 国際家族計画連盟, ロックフェラー財団, フォード財団, マッカーサー財団 (シカゴ), ヒューレット財団からの代表で, 総計21名であった. 著名人物として国連人口基金からはナフィス・サディック事務局長, ジョティ・シン技術評価部長, ロックフェラー財団からはピーター・ゴールドマーク会長, スティーブン・シンディング人口科学部長, ジョージ・ザイデンスタイン ポピューレーション・カウンシル会長, インドネシアのハルヨノ・スヨノ国家家族計画評議会議長, オランダ外務省のニコラス・ビーグマン国際協力局長等が出席している. 日本からは河野稠果 厚生省人口問題研究所長が出席した. 議長は前回と同じくシンディング氏であった. 出席者のリストはこの報告書の最後に付されている.

この2日間の第2回準備委員会の議題は次のようであった.

1. 主催者の挨拶
2. 国際人口委員会の目的の再確認
3. 国際人口委員会の権限と役割について
4. 同委員会の議長・委員および事務局長の構成
   a. 議長の選出, b. 委員の構成, c. 事務局のスタッフ
5. 国際人口委員会設置に関する事項
   a. 国際人口委員会に関する正式なタイトル, b. 事務局の所在地, c. 将来の集会, ヒヤリング, 報告書, 出版物のスケジュール, d. 各国との連携協力活動 (ヒヤリング, 各国や各地域の人口委員会との協力), e. 予算, f. 資金集め, 主要国・機関に対する醵出金要請

これについてくわしくは, 次号掲載の河野稠果による報告を参照されたい. (河野稠果記)